

郷土資料館展示資料(その3)

呉服太^{たん}(反)^{もの}物店の荷車

郷土資料館には、明治時代西洋医専用の人力車と並んで、呉服太物店使用の「荷車(二輪車)」が展示されている。

一般に荷車といえば、大八車を想像するが、この荷車はその約半分で、全長175cm、幅112cm、高さ143cmにもかかわらず、両輪の直径は98cmもあって非常に引きやすい。

また、人力車なみに板バネが取り付けられ、その上に全長80cm、幅52cm、高さ59cmの黒漆塗りの木箱が固定され、大八車のイメージとは違った優雅な姿である。

木箱には、メッキした金属板の浮き出し文字で、正面に「㊥」の屋号、両側に「㊤ 電話七二四番」、裏側に「成田呉服店」とある。

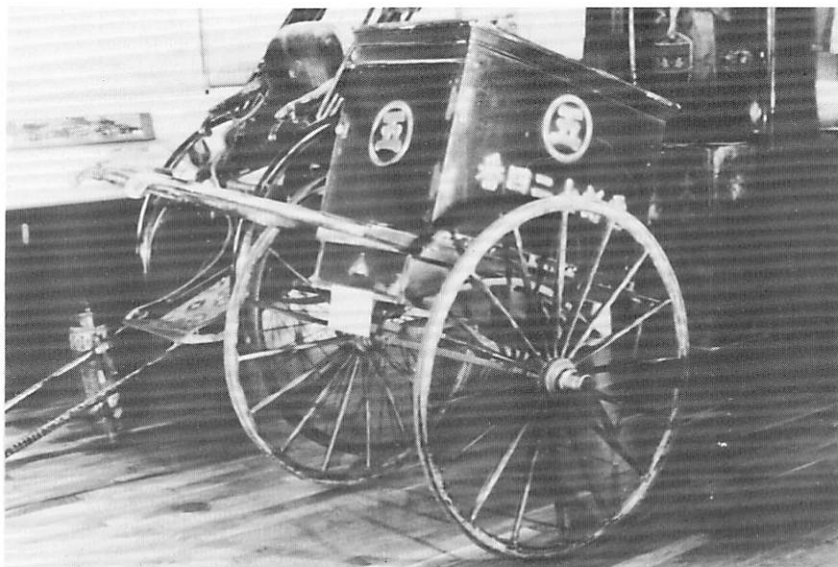
この形に類似した二輪車は、東京・大阪など全国の大都市の商店においても、明治時代に普及されていたらしく、古い写真などに見かけることがある。しかし現存するものは、全国で果たして何台あるだろうか。

荷台使用の成田呉服店は、明治22年(1889)頃の開業、電話番号の七二四番は明治36年代加入のものであるが、当時の電話帳には「七二四番 成田嘉七 大黒町五三

呉服太物卸小売商」とあるから、おそらく明治の後半から大正時代にかけて使用したものと推測される。

唐草模様のふろしきに衣類を包み、それを小僧が背負って、得意先を回っていた時代に店の住所を入れず、電話番号を誇示するかのよう、大きく記入したこのような二輪車を、街に村に繰り出した呉服商人が、函館には幾人いたことだろうか。

荷車は昭和50年に松橋多惣治氏から寄贈されたものである。



——研究室から 事務室から——

明日への博物館を思いつつ

市立函館博物館勤務を命ぜられてから、3年目に入り、ようやく博物館の空気（言葉ではとても表現できませんが）にも慣れてきた今日このごろですが、博物館としての運営方針である“市民に親しまれる博物館”としての、市民の教養、調査研究、レクリエーションに資するための博物館体制の充実、博物館活動の促進という目標に対して、すべてとはいえないが博物館関係職員、如何なる自覚を持っているか、疑義を感じずの昨今である。たとえば研究室（学芸職員）と事務室（庶務関係職員）との意識の相違、私見であるが博物館は学芸職員が主役であり、博物館運営に対し学芸職員が主体性を持ち行動をとるべきと思うが一国一城の主という自意識があり（偏見かな）諺に“船頭多くして船山に上がる。”が現状ではなかろうか。たしかに地方自治体に共通しているであろう、予算、専門職員の不足等まだまだ改善されるべきものが、多々あるにせよ、“市民に親しまれる博物館。”にするために、研究室、事務室共々努力すべきと考え、あえて提言する。

〈主事1級 横山 勉〉

窓口から見た観光客の変遷

例年同様旅行者が当博物館五稜郭分館を、おとずれてゆく。当館の前の大砲の所で写真を写す人もいれば、大砲に乗って遊んでゆく子供達などさまざまである。窓口である受付業務はいつも大入満員で、一日中いろんな人が出入りをしている。市内の人もいれば、四国、九州からの人もいて、遠くはフィリッピン、台湾の団体の人も近頃では少なくない。

また、これら旅行者の服装も年々変わりつつあり、以前のように固いイメージのスーツやワンピースなどというスタイルは近ごろでは珍しくなっている。最近、海水浴にでも行くがごとくの服装であるのが多い。

このように変化がめまぐるしい中で“かに族。”とよばれる人々が、みかけられなくなっているのもまた時代の流れを思わせる。4～5年前だったら、函館駅、朝市、電車の中などで、よく若い男女がリュックを肩にしていたり、この五稜郭にもよくテントを張って朝になると手洗場で顔を洗っていたり、朝食にはパンや缶詰など食べている姿も、しばしばみうけられたが、今ではほとんどと言っていいほ

どいない。グループや友達など、若い人のあいだでは車の旅行が増えてきている。また一年を通して旅行者の出足が分かれている。4月～6月頃までは修学旅行、6月～9月頃までは団体や家族づれが多く、秋から冬場にかけては、新婚さんと思われるカップルや、ほんとうに旅行好きと見える一人旅の人が多く目につく。

〈主事1級 島尻 弘子(旧職員)〉

学芸員の立場から

「おじさん、この花何っていうの?」、小学生が見慣れぬ花をもつてきて質問する。植物の専門ではない私は「2・3日後においで、調べておくよ」「博物館では、すぐにわかると思ったのに……」。

博物館の職員は何から何まで知っている万能選手で、即解答がでてくると思っているらしい。このような考えは子供ばかりではなく大人にも見られる。

さっそく、図書室で調べる。2・3日後、その子供がやってくる。小脇に植物図鑑をかかえてきている。広げて「これらしいね。おじさん」。博物館所蔵より専門的な図鑑である。

とかく、我々学芸員は雑芸員といって自嘲する。時には芸者論もでてくる。とにかく専門に関係なく何でも用を足せなければならない。朝に植物観察会を企画し、午後には考古資料の整理、夜には天体観測の講師をやっているような学芸員の少ない博物館が多々あることだろう。

学芸員は皆落ち着いて研究をしたいと思っているが、中小博物館ではぜいたくなことなのかもしれない。「市町村立は、どこか大学や研究機関の情報を利用すればよい。自らの研究なんておこがましい。余裕のある自治体ならいざしらず……」という声さえ出てくる。

かつて、福永重樹氏が朝日ジャーナルに「国民との結びつきを求めて」の中で、「大学教授や高名な評論家にならんとして、学芸員の職を準備期間として、博物館在职中できるだけ資料をかき集め、自己の研究に専念し、博物館の責務である教育普及や資料の整理、保存の仕事をしない学芸員と、これらの業務を一切カバーしている学芸員が、何年か過ぎると、一方は助教授、教授となり、一方は論文も発表しない学芸員である。後者は世間も無能とか怠慢と評価する」とあった。多人数の学芸員を擁する博物館ならではの話であろうが、当館の学芸職員は皆後者である。

さあ、どちらへ進むべきか、答えは明らかである。

〈学芸員 岡田一彦〉

はくぶつかん展示室



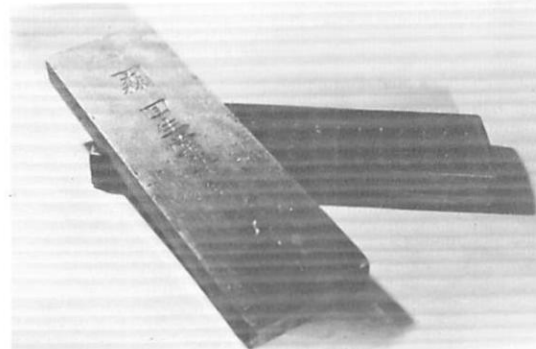
▲陣羽織

明治元年11月5日、及部村（松前町字旭）根森の砲台で、榎本軍の攻撃を受け戦死した松前藩士田原音八の所用で、3か所に弾痕がある。遺族がその勲を長く子孫に伝えるため、裏地に戦死の状況を414字にわたり墨書したものである。
 〈昭和33年購入〉

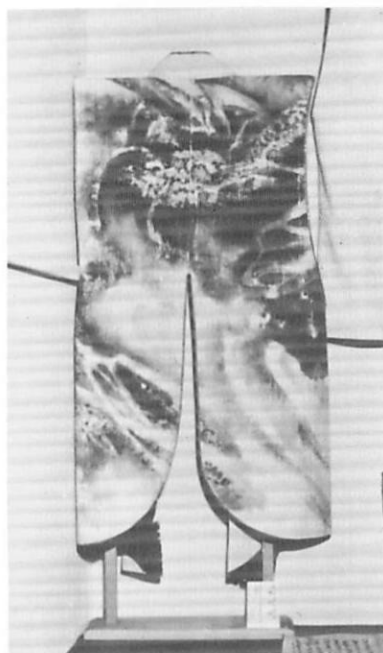
▼「古いそろばん」

このそろばんは、長さ27.5cm、幅11.3cm、厚さ3.5cm、5ツ玉の古いものである。裏面に「洞回生堂薬舗」と刻まれている。

明治、大正の頃、渡辺熊四郎が開業した金森洋物店は、他に時計、書籍、薬などを扱った支店が数軒あったが、洞薬舗もまたその名残りである。
 〈橋場とよの氏 昭和54年寄贈〉



▶墨絵陣羽織
 白帆布地に、前面および背面に墨一色で竜を描き、僅かに目玉だけを彩色したもので、それがまた一層図柄を引き締めている。早坂文嶺の落款があり、文嶺は松前藩お抱え絵師としてアイヌ絵に勝れたものを残している。
 〈昭和三十年購入〉



▶遊撃隊長 人見勝太郎

「慶応四年（一八六八）函館戦争之時魯国宣教師ニコライ館ニ於テ撮影ス」と自筆があり、脱走軍による蝦夷政権樹立後、二五歳で松前奉行に任ぜられた当時の戦争写真は総て田本研造撮影と思われがちの中に、一石を投じた貴重な写真である。
 〈片上シヅエ氏 昭和四四年寄贈〉



博物館日誌抄 (54.1.1~54.12.31)

54. 1. 4 御用始め
 28 市民講座 (土器をつくる会)
 講師岡田一彦学芸員・五十嵐丸人氏
54. 2. 17 利尻町教育委員会、渡辺恭平委員長以下4名
 博物館運営状況調査のため来館
54. 3. 22 博物館協議会開催
54. 4. 21 江ノ島水族館長広崎芳次氏・函館商工会議
 所一行来館
54. 5. 1 函館博物館開館記念展“博物館100年のあ
 ゆみ” 開催 (～6月30日まで)
 12 科学教室 (春の星座観測会)
 講師津川軍次郎氏
 17 茨城県議会議員10名来館
 18 道立記念館資料調査課長・関秀志氏来館
 25 函館博物館開館100周年記念式典
 10:30から (五嶋軒本店)
 31 北海道教育委員会、教育部長他3名来館
54. 6. 1 釧路市議会議員5名来館
 5 国学院大学文学部教授加藤有次氏来館
 12 文化財調査官浪具毅氏、道埋蔵文化財係長
 波津俊昭氏、道調査第一班主査竹内輝雄氏
 来館
 16 科学教室 (プラネタリウム見学会)
 講師津川軍次郎氏
 17 市民講座
 (博物館100年のあゆみ) 講師池田和男館長
 (絵図地図から見た蝦夷地と函館)
 講師高木崇世氏
54. 7. 7 科学教室 (七夕の星座観測会)
 講師津川軍次郎氏
 14 科学教室 (植物野外観察会)
 講師宗像和彦氏
 29 科学教室 (植物野外観察会)
 講師宗像和彦氏
8. 1 新館長浦野彦正発令
 8 市民講座 (母と子の土器をつくる会)
 講師岡田一彦学芸員・五十嵐丸人氏
 10 市民講座 (母と子の磯の生物観察会)
 講師中野末司・高橋 豊・干場達夫氏
 12 市民講座 (母と子の土器をつくる会)
 講師岡田一彦学芸員・五十嵐丸人氏
 13 科学教室 (昆虫野外観察会)
 講師中嶋康二氏
 18 科学教室 (夏の星座観測会)
 講師津川軍次郎氏
 19 市民講座 (食べられる野生植物観察会)
 講師宗像和彦氏

54. 8. 21 博物館協議会開催
 31 日米ろうあ者交流会一行13名来館
54. 9. 8 科学教室 (秋の星座観測会)
 講師津川軍次郎氏
 “ 登別郷土文化交流研究会18名来館
 19 青函交流26名来館
10. 5 科学教室 (中秋の名月観測会)
 講師津川軍次郎氏
 20 科学教室 (昆虫供養と講習会)
 講師中嶋康二氏
 21 市民講座 (市民のための函館史跡文化財
 めぐり) 講師山口道雄氏・真崎宗次氏
 27 科学教室 (冬の星座観測会)
 講師津川軍次郎氏
10. 28 市民講座 (母と子の土器をつくる会)
 講師岡田一彦学芸員・五十嵐丸人氏
54. 11. 15 千歳市教頭会18名来館
 27 空知管内市町村次長6名来館
 29 国立民族学博物館3名来館
54. 12. 28 御用納め

最近受入れた資料

- 函館の絵はがき 34枚
 【富崎善雄氏寄贈・函館市本町5-10】
- 和船の錨 1点
 【玉村栄吾氏寄贈・榎法華村字元村83】
- 掛図他1点 2点
 【高井武夫氏寄贈・函館市船見町4-13】
- 父鎌田栄吉を偲ぶ (写真4枚入新聞切抜) 1冊
 【鎌田博一氏寄贈・函館市湯川町1-7-27清和荘】
- 国債券等 6点
 【大坂谷道三氏寄贈・函館市杉並町20-22】
- 蓄音機他58点 59点
 【齊藤文子氏寄贈・函館市松陰町10-3】
- 髪結道具 1式
 【大館ナミ氏寄贈・函館市東雲町17-10】
- ルーブル美術館録画フィルム 1巻
 【UHB北海道文化放送・札幌市中央区北1西14】
- そろばん 2丁
 【橋場とよの氏寄贈・函館市末広町21-1】

Hakodate City Museum News
 SARANIP-サラニップ-No.19 1980.3.31発行
 編集・発行 市立函館博物館 (TEL0138-23-5480)
 北海道函館市青柳町・函館公園内 (〒040)